

野菊とロマンス

会員 上野 裕平

1 野菊の如き君なりき

映画監督の木下恵介と言えば『二十四の瞳』が有名ですが、私はこの『野菊の如き君なりき』も大好きです。

純粹でまっすぐな少年と少女の恋が、身分の違いゆえに散ってしまう悲恋の物語です。特にヒロインの民子の清楚で儚い美しさが印象的でした。本作は1955年に公開された作品ですが、1950年代は溝口健二、小津安二郎、黒澤明といった名監督が活躍し、歴史に名を残す日本映画が数多く誕生した、日本映画の“黄金期”でした。

2 弁護士になる前

この“黄金期”と並べていいのかわかりませんが、長く洋画優勢だった邦洋の興行シェアが逆転し、邦画全盛となって久しい2010年に私は映画業界に飛び込みました。

そして、約10年間、映画プロデューサーとして働き、“黄金期”の監督たちに負けず劣らずくせ者ばかりの映画業界で激しく揉まれながら過ごしてきました。

映画制作には多くの人が関与しますが、監督、脚本家、スタッフ、キャストはいずれも自分の腕一つで仕事を獲得していました。自分もそういう仕事をしてみたいと思い、弁護士になりたいと思いました。

3 弁護士になってから

弁護士登録をして約1年が経ちましたが、家族、先輩方、前職からのお付き合いの方々に多大な支援をいただいて、なんとか仕事をしています。

会社員から弁護士になったという点は大いに変化でしたが、それ以上に、第1子誕生の以前と以後で人生は全く別物になりました。毎日がジェットコースターのように慌ただしく、自分の両親がいかに偉大かということを感じました。

一方で、子どもは毎日なにかしらの感動を私と妻に与えてくれます。これは何物にも代えがたいものです。

4 取り組んでいきたい仕事

昨年は、映画やアニメの製作会社、芸能事務所、出版社、音楽レーベルといった取引先とお仕事をさせていただくのが半分で、残りの半分は企業法務、一般民事、家事、刑事と幅広くお仕事をいただくことができました。

ジャンルを問わずあらゆる事件に取り組ませていただき、この1年で大きく視野が広がりました。今後も専門分野に拘泥せず、様々な事件に取り組みたいと考えています。

その中でも、エンターテインメントのお仕事は今後も継続して取り組んでいきたいと思っています。映画プロデューサーのときと同じく、どんな作品でも待っているお客様がいると信じて、一つでも多くの作品をこの世に送り出すことができればうれしいです。

5 トゥルー・ロマンス

この映画の脚本は『キル・ビル』で有名なクエンティン・タランティーノが手掛けています。タランティーノは本作が公開された1993年の前年の1992年に『レザボア・ドッグス』を監督し、翌年の1994年に『パルプ・フィクション』でパルム・ドールを受賞するなど、当時クリエイターとして圧倒的な輝きを放っていました。本作はそのタランティーノのストーリーテラーとしての実力がいかに発揮されたラブストーリーの傑作です。

本作をどうしても映画館で観たかった20代の私は、上映があると聞きつけ、新幹線で金沢まで足を運び、映画館で本作を鑑賞しました。あのときの感動は今でも忘れられません。

当時のように、純粹でまっすぐな気持ちを忘れずに、今後も仕事に取り組んでいきたいと思っています。